

# 幼 兒 教 育

第二十卷  
第一號

大正九年一月一日發行

## 幼 兒 の 調 節 生 活

奈良女子高等  
師範學校教授 森 川 正 雄

保育といふ事は幼兒の發達を助長することである。さてその發達といふ事は如何なる事かと言ふに、生物がその環境に段々よく調節し適應し行くと言ふ事に外ならない。そこで、保育といふ事は、畢竟は、幼兒をして其の環境に對する調節生活を學ばしめると云ふ事になるのである。すべて生物はその遺傳的性質を中心本據とし之を環境に調節し行く事によつて生存もし發達もするのである。それは、此の外界環境と言ふものは生物に取つて有利なもの許りてなく實に無數の有害物があるからである。だから若し此の調節が好都合に行かないと只に發達が出來ないのみならず、生存が危険になるのである。それであるから、是等の有利なものを取り有害なものを逃れる爲に、自分の方を變へるか又は外圍の方を變

へるかせねばならぬ。即ち此に改造問題が起つて來るのである。今、この改造問題即ち調節生活について、動物並に幼兒の生活中の最も有りふれたる二三の例をあげて見ようと思ふ。

一體動物はもとは皆、水中に棲んで居つたものらしいが、陸上の方が食餌となる植物が多く、又酸素も多いから、先覺冒險の動物は段々陸上生活をしようと思ひ立ち、次第に自分の身體を改造し始めたのである。所が陸上の空氣は生物を乾干にする恐れがある。そこで身體を被ふに巧な外皮を作り又鰓の代りに肺を造つたは最大の發明であつた。人間はその中の最優者なのである。しかしまだ此の乾燥に抵抗する用意の出來て居ない動物は矢張、水邊に棲んで居り、又は鰓と肺と二つを持つて居つて雨期、乾期

に對し兩天かけをして居るのもある。人間も勿論まだ全くは水中生活を脱する事が出来ず、今でも母胎内にある時だけは羊膜液中に生活すること魚の水中に在ると異ならず、また鯨時代は此所で經過することにして居る。さうして羊膜といふもので此の水分を逃がさないやうに嚴重に保護して居るのである。これは乾燥に對する調節生活である。幼稚園の子供も夏になると水を呑み、水遊びを欲する。まことに自然の要求で之も乾燥に對する調節生活に外ならぬ。

日光に對してはムグラの様に一旦持つた目が邪魔だと言つて止めにしたものもあり、又鼻や狼などのやうに夜中に活動するが利益で、光線は少くても用が足りるやうになり、其の代りに嗅覺や觸覺などを鋭く使つて居るのもあり、又一般鳥類のやうに晝間活動するので専ら目を使ふのもある。幼兒の目は始の程は明暗を識別するのみで半年位を過ぎ、その後だん／＼と赤青黄といふ風に色彩がわかるやうになるが、大抵は滿一歳以後である。光力に對する瞳孔の調節、視力の疲勞に對する瞼の閉合物體の大小遠近による眼球の調節などあるが、一般に細筋は疲れ易いから幼稚園の子供の仕事など過細なのは最もよ

くない。近視眼はつまり調節の恢復即ち調節の調節出來損くつた結果である。

乾燥並に溫度に對して動物は色々な作用をする。熱ければ發汗して溫度を下げ、寒ければ食物を澤山取つて體溫を高める。食事について、なほ例を取れば、乳を呑む動物には柔かな唇があり舌があり哺乳時の初め大部分に齒は多くは出ない。子供の胃は管狀の時があり乳母車などに乗せて體をゆすぶると乳を吐くことがある。次第に胃は大きく成り行くが、まだ食物の必要量と胃の容量との割合が大人の様くないので、一時に澤山食べ込む事が出来ず、幼兒は食事をたびたびせねばならぬ。大人は之を餘計なこゝと思ひ違へ、自分標準で間食と名づけ、どうかすると叱つたりするが、是等はみな必要な調節生活なのである。

動物はまた共棲といつて、他動物の保護を受け其の代りに利益を酬うて生活するがあり、只利用するだけのものもあり、又全く他動物の身體に寄生するものもあるが、此の共棲や寄生がその度を深くすると、動物は段々、不使用の器官を退化せしめ、感覺器や運動器や遂には消食器までも失ふものがある。此の

使はない機官や機能が發達したいと言ふ事は、過度の保護干涉の下にある幼兒が兎角に身體虛弱意氣銷沈となるのも分る。之は寄生とは言はないが自ら使ふ事のない機官機能が鈍ぶると言ふ事は同じである。

使へば保存され、使はねば消滅する事は幼兒の發音や言葉が明に之を示して居る。元來幼兒は三四歲頃迄に種々多様の音聲を發するものであるが、其れが母親の發音に一致したのだけが残り他は次第に消え行く又言葉も母親や家族や土地の人達の使ふ言葉となつて仕舞ふ。

動物の中には他の弱い動物を餌食とするのがあり又競争の結果互に喰ひ合ふのもある。是等は互に益々防禦法と攻撃法とに工夫を凝らすことになる。どちらにも一瞬時も油斷することが出来ない、油斷した方が滅びる事になる。そこで攻防具として色々なものを造り出す。介殼や鱗甲や毒牙や毒腺があり又保護色だの擬態だの欺瞞だの放臭だの色々ある。是等は攻防の競争が生み出した産物である。幼兒は友達同志で、遊戯をして、人間の攻防法に關する遺傳的本能を練習するものであるが、孤獨に棄て、置いて

は其れらの本能は發達の機會はない譯である。

動物には孤棲のものがあひ群生のものがあり或は一時集合するものもある。蜂や蟻のやうに女王、王、働き手といふ風に秩序井然たる社會生活をして居る動物では團體の利益といふ事を強烈に要求する。雄蜂などは役がすむと自らすぐと死んで仕舞ふ、役がないのは他のものに殺されて仕舞ふ。幼兒も幼稚園位の程度になると仲間の制裁といふ事を相當に行ふものである。幼稚園で子供が『團體生活に於ては各自の我儘勝手は許されない』といふ事を學ぶのは教育上大に價値のあることである。

右に述べた様に發達といふことは自己と環境とを出來るだけ改造し行くことさうして其の間に調節を保ち行く事に外ならぬ。改造と調節との進歩が即ち發達なのである。さて吾々人間は長い歲月の間に幾たびか進化の岐路に踏み悩んだものであるが、其の度ごとに色々な性質を取り或は棄て、今日在るが如き遺傳的性質を作つた。さうして此の性質を幼時即ち親の保護を受け得る間に大體具體化することにして居る。大人は、またも自分標準で、之を幼兒の遊戯と名づけて居るが、幼兒に取つては只の娛樂とは

違ひ、重大な要求眞面目な生活であるのである。人類の大きい調節生活の一つである、

さて幼児にかゝる調節生活を學ばしめる爲には、能くその遺傳性の成熟期や發展状態を洞察し、時に應じて良材料、良機會を供給せねばならぬ。此の事は之をたゞ自然に任せて置くだけでは中々うまく行くものではない。これらは皆家庭の父母や保育所の保母の工夫と努力とに期待せねばならぬのである。

○おたより

倉橋先生は豫定の如く去る十二月十三日外遊の途につかれ先づ米國へ向つて出發されました。十六日にコレア丸上の先生から無線電信が参りました。

タイへイヨウ ノ ヒロサカナ

茫渺たる大洋を過ぎつて先生は舊臘中にサンフランシスコへお着きになつた筈です。また時々のお便りを皆様ともに待ちませう。

○思ふまゝ

母親が我が子の遊び相手になつてゐる時はそこ何とも云はれない落つきがあります。母親には「自分の子供である」と云ふ自然の安心がありますから他の人「石使ひでも又は親戚關係の人でも」がお相手をしてゐる時はその空氣は何となく騒しいものです。たゞ矢鱈によく遊ばせやうと骨を折り「我がもの」と云ふ安心がなくて「托せられたるもの」と云ふ所から一種の責任の感じがつよいためでせう。幼稚園でも受持保母とその子供達との間には一種の落付き静けさがあります。時には今この室に居るのかと思はれる程しづかに、先生と子供とは融合してゐます。それが何かの場合に受持でない先生がその子供達を預ると、先生自身が静かでありませぬ。何だかあせります。やつぱり「自分のもの」になつてゐないためです。

大人が二人相對した時でも、お互の間に不安があると、どうも二人はお喋舌をします。黙つてゐるのが恐しい様で。しかし親友になると二人向き合つて平氣で長い間沈黙してゐます。そしてそうした落付きが、何とも云へず嬉しいものです。(T子)